
漆黒の勇者の物語

疾風迅雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漆黒の勇者の物語

【Nコード】

N5509N

【作者名】

疾風迅雷

【あらすじ】

10年前、アルカディア王国では戦争があった。

魔王が現れ世界に宣戦布告をしたのだ。

そんな中、魔王を殺すために戦った、一人の英雄がいた。

そして現在、ふたたび魔王の侵略が始まるとしていた。

初投稿です。未熟者ですが頑張りますのでよろしくお願いします。

感想などいただければ幸いです。

第一話、第二話、改変しました！

プロローグ

統合国家アルカディア。

そこは剣と魔法の王国。

様々な種族が暮らしており、この世界で唯一の国家だった。世界は一つになり平和を謳歌していた。

しかしある時、自らを魔王と称し、全ての生物を滅ぼすとして、世界に宣戦布告した男がいた。

当初アルカディアの人々はそんな事が出来るわけがないと考え、相手にしなかった。常識的に考えて一人で世界を相手にするなんて不可能だからだ。

しかし男はその常識をひっくり返した。

男は自身を魔王と称すだけあり、その強大な魔力を持っていた。

また、彼は凄まじい数の魔獣を作り出し従えることによって世界の敵になった。

この戦いを人々は後に第一次魔王戦争と呼んだ。

しかしこの戦争も一人の英雄の登場によって終結を迎えることとなる。

アルカディア王国
極東方面 魔王軍本拠地
最前線

少年は戦場を駆けていた。まだ10代前半だろう。黒いコートに黒い剣、顔には仮面を着けている。

戦場を駆ける。少しでも早く魔王のもとへ向かうために。

「・・・邪魔だ。」

目の前に出てきた魔獣を袈裟斬りにし、手首を返して横の敵を迎撃する。血が飛び散り、鉄臭い匂いが鼻を突く。

どうでもいい話だが、どうやら自分はアルカディア軍の中で英雄と呼ばれているらしかった。

特別なことをしたつもりはない。ただ、魔王を殺す、そのためだけに剣を取り、魔法を学んだ。

さらなる力を手に入れるために禁呪と呼ばれる物にまで手を出した。

「ハアッ！」

少年の手の甲に刻まれた紋章のような物が赤い光を放つ。

血のように赤いオーラが少年の体を包む。

すると少年の動きが格段に速くなる。

これこそが禁呪。

命を代償に圧倒的な力を得ることが出来る。

しかしこの代償は非常に大きいため王国では禁止されている。もつとも禁呪を扱える人間など数えるほどもいないが。

そして、ついに少年は魔王のもとにたどり着く。

「ドスッ」

少年の剣が魔王の心臓を貫く。

魔王の死とともに世界中の魔獣が活動を停止した。

ここに第一次魔王戦争は終結した。

第一話 黒の騎士団（前書き）

すいません。

投稿が非常に遅れてしまいました。
では本編をどうぞ。

第一話 黒の騎士団

一10年後一

アルカディア王国

黒の騎士団 修練場

side エルトリーゼ・ローレンス

なんたることだ。

黒の騎士団隊長、エルトリーゼ・ローレンスは思った。

黒の騎士団とは第一次魔王戦争終結後に結成された騎士団である。

10年前、魔王戦争で魔王を倒したのち失踪したと言われる伝説の

「漆黒の英雄」の戦闘データを元にした、戦闘術を使い、第二の魔王への切り札とすべく作られた。

鎧も武器も全て黒。

ゆえに黒の騎士団。

由緒ある騎士団。

わたしも漆黒の英雄に憧れてこの騎士団に入った。認められようと一心不乱に修練を重ねた。年頃の娘がするようなことはほとんどしなかった。この騎士団の隊長に任命されたときなど、つい泣きそうになってしまった。

なのになんなのだ、この体たらくは！

「貴様ら！いつまでだらだらしている！」

やる気がないのだ。

「でも隊長、戦う相手もないのに何のために訓練するって言う

んすか？」

騎士の一人、ハルト・ウォルターが気だるげに言う。

そう、平和なのだ。第一次魔王戦争以来、第二の魔王など現れなかったし、魔獣だってほとんど現れなかったのだ。

騎士達のやる気が無くなるのも当然と言えば当然だった。

「もしもの時のために訓練をするんだ。いつ、いかなる時でも物事に対応出来るようにしておくのが騎士の務めだ！」

「でも、みんなのやる気が無くなるのも仕方ないと思うよ」

振り向くと副隊長のエレナ・カーライゼルがいた。

「エレナか、っていうかお前は副隊長なんだから、思うように、じゃなくてなんか言え！」

まったく、副隊長がこれでは士気も上がらん。

「だってねえ、普通の騎士なら、儀礼とかに出たりするけど、私達是对魔王、魔獣特化部隊だから、奴らがいないと仕事できないし。そのせいで周りからは邪魔者扱いされるしねえ、士気を上げろっていう方が難しいわよ」

「だからと言って訓練を怠って、いざというときに戦えなかったら本末転倒じゃないか。それに今この瞬間にも魔王や魔獣が現れる可能性があるんだぞ！」

「そんなこと言っ」

そこでエレナは話すのを止めた。

なぜなら衛兵が真っ青な顔をして訓練場に駆け込んできたからだ。

「ローレンス殿、ローレンス殿はいますか！」

「ここだ」

「大変です！魔の森でワイバーンが確認されたとの報告がありました！」

「何！本当か？」

「はい、かなりの数がいるとのことですよ。」

まさか本当に現れるとはな・・・。

「よし！黒の騎士団、久々の出撃だ！」

「「「「「おおおおおおおおお！」」「」「」「」

久しぶりの戦闘でみんなテンション上がってるな・・・。

ちなみに魔の森とは、アルカディア王国の首都から北へ三キロほど行ったところにある森である。

アルカディア軍と魔王軍が最初に戦った地であるといわれている。人工的な魔獣の発生した、はじめての場所であったため魔の森と名付けられたそうだ。

まあ今はとにかく魔の森に向かおう。

アルカディア王国
魔の森

side エルトリーゼ・ローレンス

「ぜえええええい！」

バギン！

急降下してきたワイバーンを赤いオーラを纏った剣で弾き返す。

ワイバーンは最強の魔獣と言われるドラゴンの最下位種である。

最下位種と言えども立派なドラゴンであり、非常に素早く攻撃的で、並みの騎士ではまったく歯が立たない。

しかし！私達は生憎と並みの騎士ではない！

伝説の「漆黒の英雄」

の流れをくむ、黒の騎士団である！

黒の騎士団の鎧には魔術的な要因をもつ文字が刻まれており、通常
の鎧をはるかに超える防御力を持っている。

また、剣は「漆黒の英雄」の持っていた（現物はアルカディア王国
の王室に保管されている）魔剣を元に作られたレプリカで、百人近
くの魔術師の魔力がこめられている。（逆に言えばそれだけの魔力
がないと作れない）

これにより魔力の少ない者でも魔法を使うことが出来、魔力の多い
者は魔法をさらに強力にすることが出来るのだ。また自動で魔力障
壁を張ってくれたりする優れものだ。

ちなみにこの魔剣で使うことが出来る魔法は特殊なものらしい。

「スラッシュ！」

呪文とともに剣が纏った赤いオーラを飛ばす。

この剣の魔法の中では威力は低い方だが、魔力の消費が少なく、使いやすい。

バゴオオオオン！

よし、命中！

翼にスラッシュを食らったワイバーンが墜落していく。すかさず近づき首を落とす。

「む！」

ドガアアアアアン！

あ、危なかった・・・。

どうやらワイバーンのブレスを食らったらしい。

魔剣が魔力障壁を張ってくれなければ死んでいたかもしれない。

今度はこちらの番だ！

「ハアアアアア！」

魔剣の刀身に魔力をチャージする。

魔剣の纏っていた赤いオーラがまばゆい光を放つ。

「ブラッド・ストライク」オーラが爆発的に発生し巨大な真紅の剣となる。

「ぜえええええい!!」 巨大な剣が上空のワイバーン達をまとめて切り裂く。

「ふう」

・

・
・
・
・
・
・

「「「「あああああああゝ!」」」」」

まわりの隊員達から悲鳴のような叫び声があがる。
きっと自分がたおしたかったのだろう。

「隊長ゝ、ありや、ないですよ! 久しぶりの戦闘だったのに!」

「そうですね! みんなまとめて切っちゃって、俺らの出番が無いじゃないですか!」

「ええい、うるさい! ろくに訓練もしなかったくせに!」

当然の報いだ!!

「「「「「そんなあゝ」」」」」

第一話 黒の騎士団（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

主人公がまだ出てこない・・・。

これから頑張りますのでよろしくお願いします。

あ、感想ください。

第二話 魔獣の群れ（前書き）

すいません。投稿に非常に時間がかかってしまいました。

・・・やっと主人公が出せた。

第二話 魔獣の群れ

アルカディア王国

アリエス城

城下町

アリエス城はアルカディア王国の首都中心に位置する城で、政治の中枢を担う者達の居住区にもなっており、実質アルカディアの最重要拠点となっている。

城下町には毎日たくさんの店が立ち並び、活気にあふれている。

そんな中を一人の青年が歩いていた。

20歳くらいだろうか、闇をそのまま具現化したような漆黒の髪と瞳、黒い服の上下、これでもかと言うほど真っ黒である。

背は高い。顔の造形もそこそこ整っており美形の部類に入るだろう。

「なんか楽しい事ないかなあ」

と、彼・ユウキ・レインバルトは呟いた。

「そうだ、久しぶりにギルドでも行ってみるか」

ギルドとは王国が運営する機関で、主に国民から寄せられた依頼を取り扱っている。

ギルドに登録すると、ギルドをとうして様々な依頼を受けることができる。

成功するとそれに応じた報酬を受け取ることができるのだ。

設立された当初は対魔獣用の組織だったのだが、魔王戦争終結とともに魔獣の数が激減したため、ここ最近ほとんど薬草集めや仕事の手伝いなどの依頼ぐらいしかなかったようだ。

しかし最近は一たび魔獣の数が増えてきて、依頼が一気に増えた、

と聞いている。

ユウキは大きな古めかしい建物に入っていく。

ギルドの内部は酒場のようになっている。

ユウキがカウンターに近付くと受付嬢らしき人物に声をかけられた。

「こんにちは、今日はこういった御用でしょうか」

「依頼を受けたいんだが、何か面白い依頼はないかい？」

「しばしお待ちを・・・」

「お待たせしました、面白いというより変わり種の依頼ですが、黒の騎士団から魔獣の大群を相手にするため、協力して欲しいとの依頼がありました。すでに開始されている依頼なのですが、途中参加も良いとのこと。いかがいたしますか？」

「うん、それにしてみようかな。ところで、黒の騎士団ってなんだい？」

「ご存知ないのですか？黒の騎士団は、かの有名な漆黒の英雄の戦闘術を模した技を使う騎士団です、なんでも対魔王用の騎士団だそうですね」

「ふーん。ま、いいや。それで、その依頼ってどこでやってるんだ？」

「アルン高原とのことです。場所は分かりますか？」

「ああ、大丈夫だ。ありがとう」

ユウキはギルドを出て目的地へと向かうべく歩きだした。

「黒の騎士団か・・・俺の真似をするなんて酔狂な奴らもいたもん
だ」

そう呟きながら・・・。

アルカディア王今回はアルン高原で大量の魔獣を目撃した、との情報が入ったのだ。

討伐隊は黒の騎士団を中心としてギルドのメンバーや傭兵などで組まれている。かなりの数の魔獣との交戦が予想されるからである。

「隊長！」

部下から声がかかる。

「どうした？」

「はい、偵察部隊が魔獣の軍団を発見したとのことですよ」

「よし、魔術師部隊は合図でありつたけの魔法を魔獣に叩き込め。

黒の騎士団本隊と剣士部隊は魔術師の攻撃の着弾とともに突撃。各部隊にそれぞれ通達しろ」

この作戦は単純だが、魔獣に対しては結局のところ力押しが一番有効なのだ。

「そろそろ頃合いだな」

と傍らに立つエレナに話しかける。

「ええ」

長い髪をかきあげて言う。

「攻撃開始！」

それと同時に大量の魔術が魔獣に降り注ぐ。

魔術の雨が止んだその合間を縫って剣士達が突撃をかける。

私達も行かなければな。

「黒の騎士団！我々も行くぞ！」

アルカディア王国

アルン高原

side ユウキ・レインバルト

どうやら既にドンパチやってるようだ。

その中で一際目立つ一団がいた。黒い鎧を身に付け、赤いオーラを纏う剣を振り回している。

「あれが黒の騎士団・・・かな？」

うーん、まあたしかに俺の動きに似てるけど・・・、なんか違うなあ。

「第一、俺の剣オーラ纏ってないし」

彼らの剣は絶賛オーラ発散中である。

でも彼らは予想以上に強いようだ。

あれだけいた魔獣達があつという間に数を減らしていく。

「意外に強いな・・・ん？なんだろあれ」

空に何か黒い物が浮いている、ていうか飛んでいる。そして徐々にこちらに近付いてくる。

「ワイバーンかな？いやでもワイバーンならもっと小さいはず」

お、だいぶ目がなれてきた、どれどれ・・・

ふむ、赤く輝く二つの眼、コウモリのような、しかし、貧弱さは微塵もみられない巨大な翼。

口には鋭い牙が並び、頭には巨大な角まで生えている。長くしなやかな尻尾、不思議な光沢を持つ黒い鱗。

「・・・ドラゴンじゃん」

あいつらも災難だなあ。まっ、お手並み拝見ってところかな。

アルカディア王国

アルン高原

side エルトリーゼ・ローレンス

「ハッ！」

一息で回りに群がっていた魔獣を切り捨てる。
回りを見渡してみるとあらかた片付いたようだ。

みんなに劳いの言葉でもかけようと思い、声を張り上げようとしたその時だった。

ドゴオオオオオオン！！

凄まじい爆音と共に衝撃がきた。

自動的に魔力障壁が張られ衝撃から守られる。

爆音のした方向を見ると、最前線にいたはずの剣士達が消えていた。いや、正確には戦士達のいた場所が焦土と化していた。

「一体・・・、何が？」

その答えは大地を揺るがす咆哮と共に返ってきた。

「グオオオオオオオ！！！」

聞いただけで恐怖が呼び起こされる。

そして空から「それ」は現れた。

「・・・ドラゴン、なんで、こんな所に」

第二話 魔獣の群れ（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

感想ください。その他誤字、脱字等ありましたらお教えください。

第三話 英雄（前書き）

早めに更新出来ました。

しかし、早く書いたために内容に不安が・・・。

第一話、第二話、内容を少し変更しました。

第三話を読む前に読んだ方がいいかも。

第三話 英雄

アルカディア王国

アルン高原

side エルトリーゼ・ローレンス

グオオオオオオ！！！！

聞いただけで原始的恐怖が呼び覚まされ、身体が硬直する。

ドラゴン・・・魔王が生み出したと言われる魔獣の最高傑作の1つ。特筆すべきはその膨大な魔力と圧倒的な力、そして魔術を無効化するアンチマジックフィールドだ。

はつきり言ってケタが違う。

震える身体を無理やり押さえつけ、叫ぶ。

「全軍撤退しろ！死にたくなければ走れ！」

硬直していた兵士達が我に返ったように一斉に走り出す。

しかしその瞬間、背後から恐ろしいほどの魔力が破壊のエネルギーに変換されていくのを感じた。

とっさに自分と周囲の仲間に魔力障壁を張り巡らす。いままでのような自動に張られる障壁ではない、自分の全身全霊をかけた最高の障壁だ。

張ったと認識した瞬間、衝撃がきた。

張った魔力障壁が一瞬で碎かれ、吹き飛ばされる。

何度も地面に叩き付けられ、自分が今どこを向いているのかも分か

らなくなる。

「がはっ！ぐうう！」

辺りを見渡すと自分と似たような状況の仲間が見えた。

ブレスが直撃したわけではない。しかしブレスに内包された恐るべき破壊の力が周囲に牙を剥いたのだ。

「エレナ！無事か！？」

自分の副官に呼び掛ける。

「う、うん。大丈夫」

無事だったことに安堵しつつ状況を確認する。

魔術師隊は遠距離から攻撃していたため損害はないようだ。

それに比べ前衛の戦士達は酷い有り様だった。

黒の騎士団のメンバーはなんとか耐えきったようだが、ほかの戦士は絶望的な状況と言えるだろう。

「よし、魔術師隊は遠距離から大規模攻撃魔術を行使、そのスキに前衛部隊は離脱を開始しろ！魔術師隊！あびせろ！」

それと同時に魔術師隊の攻撃が始まった。

巨大な火球や電撃の槍がドラゴンに殺到する。

ズドドドドドド！！！！

凄まじい爆音が連続して鳴り響く。

「今だ！退け！」

前衛の戦士達が退却を開始する。

その時戦士の一人が呟いた。

「よし！これなら流石のドラゴンだって！」

・・・オイ、いまそのセリフを言っちゃうと・・・

ギャオオオオオ！！！！

バシユツという音が響き、殺到していた魔術が一瞬で消え去った。

少し予想はしていたがこれには驚愕した。

あれだけの魔術を一瞬で無効化するなど常識では考えられない。

アンチマジックフィールド・・・話には聞いていたがまさかこれほどとは・・・

バヂツバヂバヂバヂ！！

ドラゴンの口に再び膨大な魔力がチャージされ始める。

まずい！

今魔術師を失うわけには！ならば・・・。

「ブラッドストライク！」長大な赤いオーラの剣をドラゴンめがけて降り下ろす、しかし、

バシユツという音と共に、無情にもアンチマジックフィールドが剣撃を無効化する。

そしてブレスが魔術師達に向かって放たれた。

ドゴオオオオオン！！

余波だけでも凄まじいのだ、直撃など言うまでも無いだろう。

魔術師隊は全滅した。

「無理だ・・勝てるわけない。みんな、みんなここで死ぬんだ！」
一人の剣士がそんな言い出す。

否、みんな口にしなくとも同じ事を思っていた。

わたしの最強の魔術も効かず、魔術師達は全滅。勝てるわけがない。

目の前のドラゴンが意地悪くニヤリと笑った気がした。

ああ、わたし死ぬんだ・・・。
でも死ぬ前に恋ぐらいしてみたかった・・・。

そう思った瞬間だった。

バツゴオオオオン！！

凄まじい轟音が響き渡り、ドラゴンが・・・高速でぶれた。

「おいおい、諦めるのがはや過ぎやしないか？」

彼は暗いムードを引き裂くようにして現れた。

アルカディア王国

アルン高原

side ユウキ・レインバルト

これは、結構まずいな。

どうやらあのドラゴンはかなり上級種だったようだ。強力なアンチマジックフィールドにあのブレス。

これでは彼らには少し荷が重いかもしれない。

「俺の腕も鈍ったかな？」

相手の力量も分からないなんて。

さてと行きますか。

両手に刻まれた刻印が紅く輝く。ドラゴンめがけて飛び込むべく足に力を込める。

「せいっ」

気合いと共に飛び出す。

「ふっ」

そして俺はドラゴンの顔面に飛び蹴りをぶちかました。

吹き飛ぶドラゴン、着地する俺。

そこでかっこよく一言。

「おいおい、諦めるのがはや過ぎやしないか？」

ふっ、決まった。

彼らは啞然とした表情で俺を見ている。

グオオオオオオ！！

おっと、こんな事をしてる場合じゃなかったな。

ドラゴンはまだ大したダメージは受けてないようだ。
ギュバツ

轟音と共にブレスが飛んでくる。

バシユウウウ！

しかしブレスは俺に命中する前に消滅する。
何をしたかって？

簡単だ。

アンチマジックフィールドを使った。それだけだ。
理論上はドラゴンと同程度の魔力があれば使える。俺にはそれだけの魔力があつたて事さ。

「さて、そろそろ終わらせてもらおうよ」

両手に魔力を集中させる。頭の中で高速で術式を組み立てる。 完
成。

「喰らい尽くせ『ジ・エンドオブダーク』」

俺の影から黒い霧の様なものが吹き出す。

それは一瞬でドラゴンを呑み込み・・・消滅した。

ふう・・・終わった、終わった。

俺は未だに啞然としている奴らを振り向いた。

アルカディア王国

アルン高原

side エルトリーゼ・ローレンス

有り得ない。

そう思った。

そう思ってしまうほどの出来事が起きていた。

突然飛び込んできた漆黒の男は、ドラゴンを吹き飛ばした後、なんとブレスをアンチマジックフィールドを使って防ぎ、闇を召喚しドラゴンを呑み込ませ、消滅させた。

もう頭が処理落ちを起こしている。

混乱した頭を落ち着かせようとしていると、その男が近付いてきた。本能的に身構える。

「貴様！何者だ！」

そうすると男は、わたしの予想の斜め上に行く答えを言った。

「俺の名前はユウキ・レインバルト、昔は漆黒の英雄とか仮面の勇者とか呼ばれていた。よろしくな！」

・
・
・

第三話 英雄（後書き）

読んでいただきありがとうございます！

これからもどうかよろしくお願いします。

感想ください。誤字、脱字、矛盾点等ありましたら教えてください。

登場人物と設定（前書き）

登場人物紹介です。

登場人物と設定

ユウキ・レインバルト

性別・・・男

年齢・・・20代前半

身長・・・180後半

体重・・・60後半

本作の主人公。十年前に魔王との戦いで凄まじい戦果を挙げた。

当時は「漆黒の英雄」「仮面の勇者」と呼ばれていた。戦争終結後は行方不明となっていた。

黒髪黒目で十分美形の部類に入る。

膨大な魔力を持ち、ドラゴンを蹴り飛ばすなど規格外の身体能力を持つ。

禁呪と呼ばれる力を使う。プロローグと本編の時に性格が変わっているが何があったかは不明。

エルトリゼ・ローレンス性別・・・女

年齢・・・19

身長・・・170

体重・・・不明

本作のヒロイン。黒の騎士団隊長。

ユウキに憧れて黒の騎士団に入った。黒髪のロングヘアで目の色は金。顔立ちは整っている。可愛いと言うよりは美人、かっこいいといった感じ。男っぽいしゃべり方をする。

エレナ・カーライゼル

性別・・・女

年齢・・・24

身長・・・162

体重・・・不明

黒の騎士団副隊長。いつもふわふわした雰囲気醸し出す。
金髪でショートヘアで碧眼。可愛いといった感じ。

ハルト・ウォルター

性別・・・男

年齢・・・25

身長・・・180

体重・・・65

黒の騎士団隊員。いつもやる気なさげな雰囲気纏っている。

赤髪、碧眼。

はつきり言って作者も存在を忘れていた。

アルカディア王国

唯一の統一国家。王族も存在するが象徴の様なもの。

魔王

十年前に存在した魔の王。魔獣を操りアルカディア王国に戦争を仕掛けた。

魔獣

体内にある魔力が暴走することで誕生する。普通の獣に比べ力が強くなり凶暴になる。

魔王はこれを意図的に作り出すことで軍勢を作り上げた。

黒の騎士団

戦争終結後に結成された騎士団。

漆黒の英雄、すなわちユウキの戦闘スタイルを元にした戦術を使う。
ユウキ曰く大分違うらしい。

禁呪

その名の通り禁じられた魔術。現在では方法が不明になっている。
使用者に絶大な力を与えるが代償として命を削る。

ギルド

王国政府が運営する、組織。主に国民から寄せられた依頼を貼り出す。ギルドのメンバーになった者はそれを受注することが出来る。そして依頼に応じた報酬を受け取ることが出来る。

登場人物と設定（後書き）

感想ください。待っています。

第四話 真実？（前書き）

すいません。今回は急展開にしすぎたかもしれません。
では、どうぞ。

第四話 眞実？

アルカディア王国

アルン高原

Side ユウキ・レインバルト

「俺の名前はユウキ・レインバルト、昔は漆黒の英雄とか仮面の勇者とか呼ばれてた。よろしくな！」

ええええええええええ!!!

うお！
うるさつ！

うん、でもこうやって驚かれるのも悪くないな。

・
・
・
フッフ、
ハッ
ハッ
ハッ
ハ！！

すいません調子乗りました・・・。

「って貴様！嘘をつくな！」

あはは、やっぱりそうなりますよね。

「まあ、助けてくれたことには感謝しているが・・、とりあえず一緒来てくれないか？国王に貴方の事も含めて報告しなければならんのだ」

マジか、あまりあいつには会いたくなかったが・・・、仕方ないか。助けちゃったんだしな。

「分かった。ところでアンタ誰だ？」

「おっと、すまない。私はエルトリゼ・ローレンス。黒の騎士団の隊長を務めている。よろしくたのむ」

「ああ、よろしく、エルトリゼ」

そうだ、仮面付けとくか、そうすりゃ正体ばれないし・・・

ってもうコイツらに見られてるし、着ける訳にもいかないか。

昔、俺はあまり人に顔を知られなくなかったので仮面を付けていたんだけど・・・。今さら付けたらそれこそ怪しまれそうだな。

はぁ・・・。

アルカディア王国

アルン高原

side エルトリゼ・ローレンス

しかし、見れば見るほど怪しい男だ。

自分では漆黒の英雄だのなんだの言っていたが・・・。たしかに強さだけは凄まじいのは分かるが、聞いていた英雄の性格とはずいぶん違うようだ。漆黒の英雄はいつも無口で無愛想で人を寄せ付けない雰囲気醸し出していたそうだ。

だがこの男はかなりあっけらかんとしている。人を寄せ付けない雰囲気など微塵もない。

不思議な男だ。

あの強さは一体・・・。

「なあなあ、アンタ、あの最後にドラゴンを呑み込んだのは何て魔術だい？」

ハルト・ウォルターが話しかける。

「あれか？うーん、あれは正確には魔術じゃないんだよ」

魔術ではない？

「魔術じゃないならなんなんだ？」

ハルトが私の疑問を代弁するかのように聞く。

「まあ、俺の能力みたいな物かな。それに魔術を加えたみたいな感じ」

「へー、凄いなあ。アンタ本当に勇者なんじゃないかい？」

「だから本当に勇者なんだって・・・」

能力か……。そう言えばあの英雄も魔術とは違う不思議な術を使っていたらしいな。

・・・本当にこの人が漆黒の英雄だったらどうしよう・・・、私剣向けたり、怒鳴りつけたりしちゃったよ、ヤバイかも・・・。

side エルトリーゼ・ローレンス

というわけで今は国王に今回の任務の報告をするために首都に来ている。

魔術師隊も全滅してしまったし、数多くの命が失われた。気が重いな・・・。

「入れ」

部屋の中から声がかかる。

「失礼します」

部屋に入ると正面に玉座があり、男が座っている。

引き締まった顔つき、鋭い瞳、幾重にも刻まれた深い皺。

彼こそが現アルカディア国王、レイグル・バロ・アルカディア。

アルカディア王国において国王とは象徴だが、政治にも参加することが出来る。今回の任務は国王からの依頼だったのだ。

「では報告を頼む」「ハッ、我らが討伐軍は魔獣の駆逐に成功、しかしドラゴンの出現により魔術師隊は全滅、剣士たちにも多大な被害を被りました。申し訳ありません」

「ドラゴン・・・だと？」

「はい」

「ドラゴンの襲撃を受けて帰還出来ただけでも行幸だ、しかしドラゴンからどうやって逃げ延びた？」

「はい、こちらに居りますユウキ・レインバルトと申す者の助力によりドラゴンが討伐いたしました」

「ユウキ・レインバルトだど!?!どこだその者は!」
「こ、こちらに」

王の剣幕に若干驚きながら後ろにいた男を示す。

「顔を上げよ」

男が顔を上げる。

「!?!」

王の顔が驚愕に染まる。

「お久しぶりです、陛下」
「!?!?!?!」

なぜか王はさらに驚いた。

「あのユウキが自分から話しかけ、なおかつ敬語・・・だど!?!?」
・お前、何があった!?!」

なんかイヤ々な予感がしてきた。

とりあえず王に尋ねる。

「で、殿下、この男は一体?」

「あ、ああ。実はこの男がああ漆黒の英雄なのだ」

ヤバイ、まさか本当に勇者だったとは、いや多少そうかもしれない
とは思っていたが・・・。てゆうかどんだけ無愛想だったんだろう・

……。ってそれよりも、ど、どうしよう、後で謝った方がいいのだろうか、いやしかし今さら・・・
エルトリーゼが思考の泥沼にはまりはじめた。

「ところでユウキよ、お前に少し頼みたいことが出来たのだが」
「なんででしょうか？」

「黒の騎士団の教官役を引き受けてはくれんか？」

「なぜです？」

「黒の騎士団がまたドラゴンと遭遇したときに太刀打ち出来る力を付けておきたいのだ。報酬は約束する。頼まれてくれないか？」

「いいでしょう。しかし条件があります。私の訓練内容には口出しをしないで頂きたい、そして衣食住の確保を約束してください」

「分かった。約束しよう」

「はい、えっと、というわけでよろしくな、エルトリーゼ」

「え？ あっ、は、はい」

え？ え？ なに？ なに？ 話聞いてない！ 反射で返事しちゃったけどなにがなんだが分からない！
一体何が！？

第四話 真実? (後書き)

いつの間にか3000PV&ユニーク1000人突破! ありがとうございます。

お気に入りに登録してってくれる方もいて自分でもびっくりです。これからもお願いします!

第五話 訓練（前書き）

すいません。非常に遅れてしまいました。こんな痴作を待っていて下さった方がいるかどうかはわかりませんが。

第五話 訓練

アルカディア王国

修練場

side ユウキ・レインバルト

「というわけで、これから黒の騎士団の教官？を勤めることになった、ユウキ・レインバルトだ！よろしくな！！！」

「「「「どういうわけだ！？」」「」「」」

説明すんの面倒くさいな・・・、そうだ！！！」

「あれがこうなってそれがああったという訳だ！！！」

「「「「成る程」」「」「」」

え！？今ので分かったの！？ねえ！？とかいう声が聞こえるがあえて無視する。

「でだ、お前達の実力を見るためにまずは最初に一人一人俺と模擬戦をやってもらおう！！！」

「「「「な、なんだってえええ！！！」」「」「」」

・・・こいつら本当にノリいいな・・・。

アルカディア王国
修練場

side エルトリゼ・ローレンス

というわけでユウキ殿による模擬戦が始まった。
てゆーか皆さっきの説明でよく分かったな・・・、わたしには半分
も理解できなかったぞ・・・。

「ほら、どんどこ来い、最初は誰だ？」

因みに念のため剣の刃は潰してある。

「お、お願いします!!」

お、一人目は、・・・・・・・・・・、誰だっけ？

え？お前隊長だろって？しょ、しょうがないじゃないか、黒の騎士
団って少数精鋭のはずなのに人数地味に多いんだぞ!!
ええい！この際、騎士Aとでもしておけ！

「隊長！今さりげなく酷い扱いをされた気がするんですが!？」

「・・・・き、気のせいだ、うん」

「その沈黙は何なんスカ!？」

「う、うるさい!さっさとやれ!」

「ひ、酷い・・・」

泣きべそをかいていた騎士Aだったがユウキ殿に向き直ると

「い、行きます!!」

と切りかかった。

私から見ても中々に速い。しかしユウキ殿はいまだに微動だにしてい

しかし、剣が命中しようとしたその瞬間、ユウキ殿の姿が掻き消えた。そして凄まじい轟音と共に騎士Aが吹き飛んだ。

「」「」「え?」「」「」

今何が起きたのか全く見えなかったぞ!?
一体何が?

「次!」

「は、はい!」

次の騎士が進み出る。

ここでは仮に騎士Bと、

「隊長!今ry」

ふう。

よし、今度は見逃さないようにしないと。

しかし、またもやユウキ殿を視界に捉えることは出来なかった。

「次！」

も、もう一度。

!

今度はわずかながらユウキ殿の姿が高速でぶれて騎士の背後に回り込んだのが見えた。

そして吹き飛ばされる騎士。

しかし、一体騎士達が何をされているのかが全くわからない。

大の男があれだけ吹き飛ばされるのだ。一体どんな技を使っているのだろうか。

「一体何をしたんだって顔してるな？ ならば教えてやろう！……それは“デコピン”だ……！」

•

-
-
-
-

•

は？

「デコピンだ!!!」

[illegible][illegible]

いやいや、まさかな、いくら英雄と言ったって

「む、信じてないようだな？では分かりやすくやってやろう。次は誰だ？」

いや、そんなこと言われてやる馬鹿なんて・・・。

「次は俺だ!」

・・・いた。

出てきたのは・・・、まあいい、騎士Dとでも・・・

「ハルト・ウォルターだ!!!」

ちっ。ああ、あの馬鹿か。

「ユウキ・レインバルトと言ったな? お前の動きは全て見切った!
!この勝負、俺の勝ちだ!!!」

いや、お前もさつき皆と一緒に驚いていただろうが。

「ほほう、いいだろう! 来い!」

「うおおおおお!!!」

ウォルターが袈裟懸けに切りつける。言うだけあって鋭い一撃だ。
しかしそれを軽く避けるユウキ殿。

「あ、あれ?」

「ほれ」

そして体勢を崩したウォルターに手を突きつける。いわゆるデコピ
ンの形で。

バチイイイイン!!!

吹き飛ぶウォルター。

「「「「ええええええええええ」」」」

まさか本当にデコピンで人が飛ぶとは・・・。

「次だ！」

しかし、今のデコピンを見て出ていく者はいないようだ。よし、こ
こは、

「お願いします！」

「お？ アンタか、確か隊長だったよな？ 期待してるよ」

よし、まずは先手必勝、行くぞ。

「行きます!!」

踏み込み、素早く距離をつめる。袈裟斬りから切り返してまた切る。
かわされる、その瞬間、ユウキ殿の姿がぶれる。

背後から殺気を感じ咄嗟に体を捻る。

すると空気を切り裂く音と共に頭のあったところを指が通過した。

絶対これはデコピンで出せる音じゃないだろう・・・。

「・・・へえ、やるな」

ユウキ殿がニヤリと笑った。

「つどうも!!」

横風ぎに切る。しかし今度も軽く避けられる。そしてユウキ殿が、消えた’。

そう認識した瞬間、意識が闇に吞まれた。

第五話 訓練（後書き）

ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5509n/>

漆黒の勇者の物語

2011年10月7日23時49分発行